



スイッチではない

小6と中3を対象にした全国学力調査が実施されました。紙の問題用紙に答えるだけでなくコンピューターを利用した CBT 方式の導入が話題でしたが問題そのものにも変化が見られました。国語では物語文や説明文がなくすべて資料や会話文の読み取りです。大学入試の共通テストにおける実用文重視の傾向がここにも表れているように感じます。塾の小6国語のテキストも学校の教科書の文からではなく、資料や会話を含む初めて見る文章を読み取る形です。先日の授業では古代人は海をずっと進んでいくと断崖絶壁になっていると考えていたという文章の読み取りでした。そこで小6男子が「地球が丸いのは当たり前なのにどうしてそう考えるのかわからない」とつぶやくと、そばにいた中1男子が「目の前の景色を見ているだけなら平らと思うのが普通でしょ」と反論、さらに高3女子が歴史的な流れを懸命に説明しようとしします。こんなやり取りが自然に発生するのがこの塾らしいと思ってしまいました。

さて私は下手ながら趣味でエレキベースを弾きます。先日も浜野にある小さなライブの店でイーグルスやクラプトンの曲のベースを弾いてきました。そんな私の憧れが“東京事変”などのバンドのベーシストで音楽プロデューサーでもある亀田誠治さんです。彼がエッセイに「今でも時々ステージでベースを弾こうとしたらネックがぐにゃっと曲がって弾けなくなる夢を見る」と書いていました。日本を代表するミュージシャンでも不安になることがあるそうです。そんな時はやっぱり練習するしかないけれど、どうしようもないのは仕事場でパソコンを前にいいメロディやアレンジが浮かばずやる気が失せてしまいそうな時なのだとか。でもそこで「やる気は“やる”を習慣にするとやる気の方からやって来る」と言っています。どこかにスイッチがあるわけではないのだそうです。

みなさんは気持ちのどこかで、そのうち誰かがやる気スイッチを押してくれると思っていますか。“やり続ける習慣”こそが次のステップにつながる鍵だと気づいてください。